

## 薄毛の状態と薄毛懸念

社会学研究科社会学専攻博士後期課程修了

鈴木 公啓

薄毛は、男女問わず多くの人々の興味関心を集めている事象である。本研究は、男性型脱毛症について、年齢を考慮したうえで、薄毛の状態と薄毛懸念との関連について検討した。さらに、社交不安、異性不安、そして外見懸念といった個人特性についても扱い、それらとの関連性についても明らかにした。15歳から69歳の男性611名（平均年齢40.47歳、標準偏差16.59）を対象とし、薄毛状態を測定するためのModified Norwood-Hamilton分類に準じたイラスト、また、薄毛懸念を測定する項目などを用いたweb調査を実施した。分析の結果、薄毛になっていると認識している人は約半数であり、薄毛という状態が決して珍しいものではないことが確認された。また、年齢と薄毛状態には弱い正の関連が認められた。そして、年齢と薄毛状態の両方を考慮したうえで、薄毛懸念との関連を検討したところ、それぞれが独立して影響していることが確認された。さらに、社交不安が高いほど、そして外見懸念が高いほど、年齢や薄毛の状態をコントロールしたとしても薄毛懸念が高いことが確認された。異性不安は薄毛懸念に関連していなかった。

キーワード：薄毛、外見、社交不安、異性不安、外見懸念

### 問題および目的

脱毛症による状態である「薄毛<sup>1)</sup>」は、男女問わず多くの人々の興味や関心を集めている事象といえる。薄毛対策のための商品やサービスは世の中にあふれており、メディアに広告があふれている。

薄毛はその外見的特徴から目立ちやすいといえる。髪（型）は容姿を構成する重要な一部であり、普通は衣服などで覆われていることは少なく、人目にさらされている。また、顔のすぐそばに位置し主に顔の上半分を囲んでいることから、注目を集めやすい。目や唇などの顔のパーツよりも比較的大きな範囲をしめる。このように、髪（型）は人目につきやすく、

その一状態である薄毛も、人々の視線を集めるものとなりうる。

日本に限らず薄毛の人は稀ではないが、日常生活においては、触れてはいけない事象とみなされることも多い。それは、薄毛に関する話題は、当人と周りの人にネガティブな感情を引き起こし、また、対人関係にも影響を与えることが危惧されるからである。そのようなこともあって、薄毛は外見の中でも注目を浴びにくいテーマであり (Butler et al, 1998), "blind spot"として無視されている (Cash, 1990)。しかし、薄毛が自他に及ぼす影響は大きく、薄毛の人が有する薄毛についての悩みも大きなものとなりうる。

薄毛は男女ともに生じ、また、深刻な問題となりうる。しかし、その当人や他者に対する影響の検討については、海外では男性を対象としたものが多い。また、日本ではそもそも、男性を対象とした研究もほとんど存在しない。女性のみならず男性の薄毛に関する心理学的知見は日本では限られている現状にある。そこで本論文では、古くから問題が顕在化している男性について論を進めることにする。

日常でいう男性の薄毛は、男性型脱毛症 (Male pattern Hair Loss, Male Pattern Baldness, または男性のAndrogenetic alopecia: AGA) によるものが多い。男性型脱毛症は、男性において思春期以降にはじまり徐々に進行する脱毛症である。発症には遺伝と男性ホルモンが関連していることが知られている (Hamilton, 1942)。日本人の場合は、20代後半から30歳代にかけてはっきりしはじめ、徐々に進行し、40代以降に完成する (坪井他, 2010)。そして、日本人男性の発症頻度は平均で約30%であるとされている (板見, 2004, Takashima et al., 1981)。

薄毛の男性は、薄毛であることで心理的な困難を抱えている。まず、薄毛であることは薄毛であることを意識させる (e.g., Franzoi et al., 1990)。そして、薄毛を意識することで苦痛が生じる。たとえば、Budd et al. (2000)においては、ヨーロッパ4カ国の男性に共通して、全体的には薄毛であるほど薄毛の苦痛が強く、様々な側面で悩まされたりしていること報告されている。Kranz (2011)によると、脱毛を受容していると薄毛がより進行していても薄毛の苦痛は低く、受容していないと苦痛が強い傾向にあることが報告されている。また、薄毛であることは社会生活の中でのストレスに強く関連し (坪井, 2008), 自尊感情の低さと関連すること (Wells et al., 1995)なども報告されている。

この背景には、薄毛が外見による印象形成に大きな影響を有している (坪井, 2008) ことがあると考えられる。つまり、薄毛にはマイナスイメージが付与されているため (須長, 1999), その他者の抱くネガティブイメージを危惧し、結果として、当人にネガティブな心理的アウトカムが生じていると想定される。実際、薄毛であることを異性からの評価の悪化につながるものとして懸念していたり (e.g., 須長, 1999), 薄毛であると魅力が低いと考えていること (e.g., Budd et al., 2000; Wells et al., 1995), そして、薄毛であると異性との交際が難しいと考える傾向があること (Razum et al. 2022) などが報告されている。また、公的自

意識が高いほど薄毛を気にし、そして異性に対する魅力が低いと思っていること (Franzoi et al., 1990) も明らかにされている。公的自意識の高さと社会的自尊感情の低さが薄毛による苦痛と関連していること (Cash, 1992) から、他者の抱く印象を考える際に薄毛がネガティブな印象を与えるという意識も喚起され、魅力を含む他者からの評価への懸念がもととなり苦痛が生じていることが示唆される。つまり、他者の抱く印象に与える影響への危惧が大きな要因になっていると考えられる。

本研究では、まずは薄毛の状態と薄毛の進行に対する懸念 (薄毛懸念) の関連について明らかにすることを目的とする。その際には、年齢も扱い、薄毛の状態との組み合わせの影響を確認する。なぜなら、同じ薄毛状態であっても、年齢によって薄毛懸念が異なる可能性、もしくは、同じ年齢であっても薄毛状態によって薄毛懸念が異なる可能性が考えられるからである。また、これまでの研究で、他者からの評価という要因がネガティブアウトカムの背景に推測されていることから、薄毛の状態の影響を踏まえたうえで、社交不安、異性不安、そして外見懸念について扱い、それらとの関連性についても明らかにすることとする。薄毛の心理面についての検討は、薄毛である者の心理的な実態を明らかにするのみならず、世の中に存在する薄毛スティグマの一端を明らかにすることにも寄与すると考えられる。

## 方法

### 対象および実施方法

2019年7月にweb調査サービス (株式会社マーケティングアプリケーションズ) に登録しているモニターを対象にweb調査を実施した。15歳から69歳の男性611名 (平均年齢40.47歳、標準偏差16.59) を対象とした。どの年齢層も同程度になるように割り付けて実施した。回答者には換金可能なポイントが付与された。調査の実施においては、著者が所属する大学の倫理審査を担当する委員会において承認を得た (受付番号: 70)。

### 調査内容

**薄毛状態** 薄毛の影響を検討するにあたり、基準に則って薄毛の程度を要因として扱うことが有用といえる。男性型脱毛症は、日本ではModified Norwood-Hamilton分類 (Takashima et al., 1981) に則り分類および診断がおこなわれることが多い。これは、海外で用いられるNorwood-Hamilton分類 (Norwood, 1973)<sup>2)</sup>を改訂したものである。多少のバリエーションはあるものの、基本的には薄毛の進行具合を反映した7段階 (タイプI~VII。ナンバーが大きい方が薄毛が進行している状態) に薄毛が分類されている。今回は、そのTakashima et al. (1981) のイラストを元に、各状態の特徴を適切に反映したうえで新たなイラストを作成して用いた<sup>3)</sup>。これについては、1名の医師 (形成外科医。皮膚科経験あり) により、妥当性があることが確認された。1から13の番号を添えて提示し、自身にもっともあ

てはまるものを選択するように求めた。使用したイラストをAPPENDIXAに示す。

**薄毛懸念**「薄毛になること (または薄毛であること) を気にしている」という項目に対し、「まったくあてはまらない」から「とてもあてはまる」の6件法で回答を求めた。1から6で得点化した。得点が高いほど当てはまることを意味する。

**薄毛対策**「薄毛にならないように (もしくは薄毛が進行しないように) 対策をおこなっている」という項目に対し、「まったくあてはまらない」から「とてもあてはまる」の6件法で回答を求めた。1から6で得点化した。得点が高いほど当てはまることを意味する。

**社交不安** 社交不安の程度を測定するために、Short form Social Interaction Anxiety Scale (SIAS-6; Peters et al., 2012) を使用した。訳はSIAS日本語版 (金井他, 2004) のものを用いた。6項目について、「まったくあてはまらない」から「非常にあてはまる」の5件法で回答を求めた。1から5で得点化した。得点が高いほど社交不安が高いことを意味する。

**異性不安**「異性に話しかけられると緊張する」および「異性に話しかけるのが苦手である」の2項目に対して、「あてはまらない」から「あてはまる」の4件法で回答を求めた。1から4で得点化した。得点が高いほど異性不安が高いことを意味する。2項目の平均値を異性不安得点として使用した。

**外見懸念**「自分の容姿がどのように見えているか気にしている」および「自分の容姿をよく見せるために努力している」の2項目に対して、「あてはまらない」から「あてはまる」の4件法で回答を求めた。1から4で得点化した。得点が高いほど外見懸念が高いことを意味する。2項目の平均値を外見懸念得点として使用した。

## 結果

薄毛状態についての回答をTable 1に示す。52.0%が分類におけるIを選択しており、他は最大で7%であった。そこで、以降はある程度の集約をして分析を進めることとした。

まず、年齢と薄毛状態の関連について確認した。暫定的に薄毛状態を7type (集約はTable 1参照)にカテゴリライズし、また、年齢層を「10代と20代」、「30代と40代」、「50代と60代」にカテゴリライズしたのちにクロス表を作成した (Table 2)。10代-20代はtype-Aを選択した者が多く、また、年齢が上になると、type-E, type-F, そしてtype-Gの割合が他の年代よりも大きいことが示された。なお、クラメールの $V = .25$ ,  $\chi^2 = 73.14$ ,  $p < .001$ であった。

Table 1

薄毛状態の分類

Modified Norwood-Hamilton分類	<i>n</i>	%	7カテゴリー	3カテゴリー
I	307	52.0	A	甲
II Vertex	44	7.5	B	乙
II	45	7.6	C	乙
II-a	39	6.6	D	乙
III Vertex	21	3.6	B	乙
III	36	6.1	C	乙
III-a	30	5.1	D	乙
IV	18	3.1	E	丙
IV-a	20	3.4	F	丙
V	7	1.2	E	丙
V-a	11	1.9	F	丙
VI	6	1.0	G	丙
VII	6	1.0	G	丙
わからない/回答したくない	21	-	-	-

注) パーセンテージは「わからない/回答したくない」を除いて算出。なお、「わからない/回答したくない」と選択したのは全体の3.4%であった。

Table 2

薄毛状態と年代のクロス表

年代	薄毛分類 (7カテゴリー)														Total	
	A		B		C		D		E		F		G		<i>n</i>	%
	<i>n</i>	%	<i>n</i>	%	<i>n</i>	%	<i>n</i>	%	<i>n</i>	%	<i>n</i>	%	<i>n</i>	%	<i>n</i>	%
10-20代	137	70.6	13	6.7	22	11.3	14	7.2	1	0.5	6	3.1	1	0.5	194	100.0
30-40代	99	51.3	19	9.8	32	16.6	27	14.0	7	3.6	8	4.1	1	0.5	193	100.0
50-60代	71	35.0	33	16.3	27	13.3	28	13.8	17	8.4	17	8.4	10	4.9	203	100.0
Total	307	52.0	65	11.0	81	13.7	69	11.7	25	4.2	31	5.3	12	2.0	590	100.0

また、先述のように、同じ薄毛状態であっても年齢によって薄毛懸念が異なる可能性、もしくは、同じ年齢であっても薄毛状態によって薄毛懸念が異なる可能性が考えられる。そこで、その点について検討することにした。なお、その際、薄毛状態と年代の組み合わせにおけるサンプルサイズの問題から<sup>4)</sup>、薄毛の分類をさらに集約することとした。今回は、薄毛進行の前段階、進行中、終盤という意味での分類にすることにし、最終的に、Type-甲、Type-乙、Type-丙とした (Table 1参照)。

年齢層と薄毛状態による薄毛懸念の得点をTable 3に示す。年齢層、薄毛状態の分類を独立変数、薄毛懸念を従属変数とした2要因分散分析をおこなった。年齢層は有意であり ( $F(2, 581) = 4.11, p = .017, \eta^2 = .01$ )、多重比較 (Holm法) の結果、30-40代が他の年代よりも

5%水準で有意に高値であることが示された。薄毛状態は有意であり ( $F(2,581) = 94.01, p < .001, \eta^2=.23$ ), type乙とtype丙がtype甲よりも0.1%水準で有意に高値であることが示された。交互作用は有意では無かった ( $F(4,581) = 1.81, p = .126, \eta^2=.01$ )。

Table 3  
年齢層と薄毛状態による薄毛懸念得点

年齢層	薄毛状態 (3カテゴリー)	<i>n</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
10-20代	甲	137	1.99	1.40
	乙	49	3.25	1.52
	丙	8	3.25	1.67
30-40代	甲	99	2.03	1.42
	乙	78	4.04	1.52
	丙	16	4.19	1.60
50-60代	甲	71	1.72	1.09
	乙	88	3.67	1.55
	丙	44	3.57	1.77

ここで、薄毛懸念の背景要因をさらに検討するために、年齢と薄毛状態の影響をふまえたうえで、さらに社交不安、異性不安、外見懸念の心理変数を加え、それらを説明変数、薄毛懸念を目的変数とした一般線型モデルによる分析をおこなった。なお、先の段階で年齢と薄毛状態の交互作用が確認されなかったことから、このモデルにおいて交互作用項は投入せずに分析することとした。結果をTable 4に示す。モデル全体としては、 $R^2 = .33, F(7, 589) = 41.19, p < .001$ であり有意であった。そこで各説明変数についてみると、年齢層は30-40代が有意に関連し ( $B = .472, p = .001$ )、薄毛状態はtype-乙とtype-丙がそれぞれ有意に関連していた ( $B = 1.64, p < .001$ , および  $B = 1.65, p < .001$ )。社交不安は関連は小さいが有意であった ( $\beta = .14, p < .001$ )、外見懸念も関連は小さいが有意であった ( $\beta = .16, p < .001$ )。異性不安は有意では無かった ( $\beta = .05, p = .192$ )。

最後に、薄毛懸念と薄毛対策の関連を検討した。相関分析をおこなったところ、ピアソンの積率相関係数は  $r = .70, p < .001$  であり、強い正の相関が確認された。

## 考察

本研究は、年齢および薄毛の状態と薄毛懸念の関連について明らかにすることを目的とした。その際、社交不安や関連する個人特性との関連についても明らかにすることとした。

Table 4

薄毛懸念を目的変数とした一般線形モデルの結果

	<i>B</i>	<i>SE</i>	$\beta$	<i>t</i>	<i>p</i>
年齢層 (30-40代)	0.47	0.15		3.22	.001
年齢層 (50-60代)	0.26	0.15		1.71	.091
薄毛状態 (乙)	1.64	0.13		12.57	< .001
薄毛状態 (丙)	1.65	0.20		8.30	< .001
SIAS	0.26	0.08	.14	3.36	< .001
異性不安	0.11	0.09	.05	1.31	.191
外見懸念	0.37	0.08	.16	4.46	< .001

まず、程度は別として薄毛になっている状態と認識している人が約半数であり、薄毛という状態が決して珍しいものではないことが確認された。なお、板見(2004)においては、日本人男性の発症頻度は平均で約30%であるとされているが、それよりも大きい割合であった。これは、評定の方法の違いなどが関係している可能性がある。

次に年齢と薄毛状態との関連について検討したところ、両者には弱い正の関連が認められ、年齢が上がると薄毛状態が進む傾向が示唆された。しかしこのことは逆に、必ずしも年齢が上がれば薄毛になるとは限らず、同じ年齢層であっても薄毛の進み具合には差異が生じていることも認識されたといえる。

ここで、年齢と薄毛状態の両方を考慮したうえで、薄毛懸念との関連を検討した。興味深いことに、両者とも関連していたものの、交互作用は確認されなかった。つまり、年齢が若く薄毛が進行している方がより薄毛懸念がある、といったようなことは認められず、単純に、30-40代が薄毛を特に意識し、また、状態が進むと薄毛を意識するようになるということであった。板見(2004)においても、同様の年代が薄毛の懸念が高いことが示されている。30代や40代は、同年代で薄毛が進行した状態の人を日々の生活で目にする頻度も大きくなるために、当人の薄毛の進行具合に関係なく、薄毛を懸念するようになる可能性がある。さらに、今後のこともより具体的に想像するようになり、懸念するようになっている可能性がある。なお、状態については、薄毛が進んでいる人はそれに伴って薄毛の懸念が高くなっているという自然なことが生じているものと考えられる。

薄毛懸念の背景要因について心理的個人要因もあわせて検討した。その際、社交不安と関連する要因を扱った。分析の結果、社交不安が高いほど、また、外見懸念が高いほど、年齢や薄毛の状態をコントロールしたとしても薄毛懸念が大きいことが確認された。社交不安も外見懸念も他者からの評価をベースとしている。つまり、他者からの評価を懸念する者が、

薄毛という側面での評価を意識した結果として薄毛懸念が生じているものと考えられる。

なお、従来は異性不安との結びつきが言及されることも多かったが (e.g., 須長, 1999), 今回の結果からはそれは確認されなかった。異性からの評価を意識し, その交流に困難を抱くケースもあると想定されるが, 全体としてはそれが薄毛懸念の喚起に強く影響するものではなく, むしろ, 上述の社交不安や外見懸念といった異性に限らない他者全般への意識の方が, 薄毛懸念に関連しているようである。つまり, 薄毛を目にする対象が意中の異性だけではなく老若男女限らず対象となっていて, 幅広い対象への懸念の方が普段喚起していると想定される。また, 異性との交際そのものの不安というよりも, 薄毛であることによって好意を得られないであろうという懸念が主たる問題であって, 異性不安が要因では無いと捉える方が適切かもしれない。これらについては, 未・既婚の状況や恋人の有無などによって変わってくる可能性はある。その点は今後さらに検討を進めることによって, 新たな知見が得られる可能性もあろう。

薄毛懸念と薄毛対策との関連, そして他の分析結果をまとめると, 以下のプロセスが想定される。まず, 年齢が高くなり, 自他の薄毛の状態も進行する。そこに, 他者の評価への感受性ともいえる個人特性の高さが相まって, 薄毛という側面での懸念が喚起される。そして, 対処行動をおこなうようになる。

今回は対処行動の具体的な内容や程度を扱っていないが, 自分がマイナスととらえている側面をどのように整えていくかという点では, 薄毛の対処は装いの一つといえる。薄毛の研究はほとんどおこなわれていないが, その背景の心理的機序を明らかにすることは, 人が外見をどのように捉えて, そして装っていくのかについての重要な知見をもたらすと考えられる。

## 注

- 1) 脱毛症の状態を示す用語であり, 日常におけるいわゆる「禿げ; ハゲ」のことである。
- 2) これは, Hamilton分類 (Hamilton, 1942) を改訂したものである。
- 3) オリジナルのイラストは, 人物の表情が一つ一つ異なっていたり, そもそも薄毛の進行の程度の描写にブレが大きく, 刺激としては必ずしも妥当性が高いとは言えない。
- 4) たとえば, 30代-40代のtype-7は1名しかおらず, 検定に耐えられない。

## 引用文献

Budd, D., Himmelberger, D., Rhodes, T., Cash, T. E., & Girman, C. J. (2000). The effects of hair loss in European men: a survey in four countries. *European Journal of Dermatology*, 10(2),

- 122-127.
- Butler, J., Pryor, B., & Grieder, M. (1998). Impression formation as a function of male baldness. *Perceptual and Motor Skills*, 86(1), 347-350. <https://doi.org/10.2466/pms.1998.86.1.347>
- Cash, T. F. (1990). Losing Hair, Losing Points?: The effects of male pattern baldness on social impression formation. *Journal of Applied Social Psychology*, 20(2), 154-167. <https://doi.org/10.1111/j.1559-1816.1990.tb00404.x>
- Cash, T. F. (1992). The psychological effects of androgenetic alopecia in men. *Journal of the American Academy of Dermatology*, 26(6), 926-931. [https://doi.org/10.1016/0190-9622\(92\)70134-2](https://doi.org/10.1016/0190-9622(92)70134-2)
- Franzoi, S. L., Anderson, J., & Frommelt, S. (1990). Individual differences in men's perceptions of and reactions to thinning hair. *The Journal of Social Psychology*, 130(2), 209-218. <https://doi.org/10.1080/00224545.1990.9924571>
- Hamilton, J. B. (1942). Male hormone stimulation is prerequisite and an incitant in common baldness. *American Journal of Anatomy*, 71(3), 451-480. <https://doi.org/10.1002/aja.1000710306>
- 板見 智 (2004). 日本人成人男性における毛髪（男性型脱毛）に関する意識調査 日本医事新報, 4209, 27-29.
- 金井 嘉宏・笹川 智子・陳 峻雲・鈴木 伸一・嶋田 洋徳・坂野 雄二 (2004). Social Phobia Scale と Social Interaction Anxiety Scale 日本語版の開発 心身医学, 44(11), 841-850.
- Kranz, D. (2011). Young men's coping with androgenetic alopecia: acceptance counts when hair gets thinner. *Body Image*, 8(4), 343-348. <https://doi.org/10.1016/j.bodyim.2011.06.006>
- Norwood, O. T. (1973). Hair transplant surgery (1st Ed.). Charles C. Thomas Publisher, Ltd.
- Peters, L., Sunderland, M., Andrews, G., Rapee, R. M., & Mattick, R. P. (2012). Development of a short form Social Interaction Anxiety (SIAS) and Social Phobia Scale (SPS) using nonparametric item response theory: the SIAS-6 and the SPS-6. *Psychological Assessment*, 24(1), 66-76. <https://doi.org/10.1037/a0024544>
- Razum, J., & Vukasović Hlupić, T. (2022). Quality of life in young men with androgenetic alopecia: A mixed methods study. *Journal of Cosmetic Dermatology*, 21(2), 794-801. <https://doi.org/10.1111/jocd.14132>
- 須長 史生 (1999). ハゲを生きる - 外見と男らしさの社会学 - 勁草書房
- Takashima, I., Iju, M., & Sudo, M. (1981). Alopecia androgenetica: Its incidence in Japanese and associated conditions. In: C. E. Orfanos, & W. Montagna, G. (Eds.) *Hair Research* (pp.287-293). Springer. [https://doi.org/10.1007/978-3-642-81650-5\\_42](https://doi.org/10.1007/978-3-642-81650-5_42)
- 坪井 良治 (2008). 男性型脱毛症 日本皮膚科学会雑誌, 118(2), 163-170.

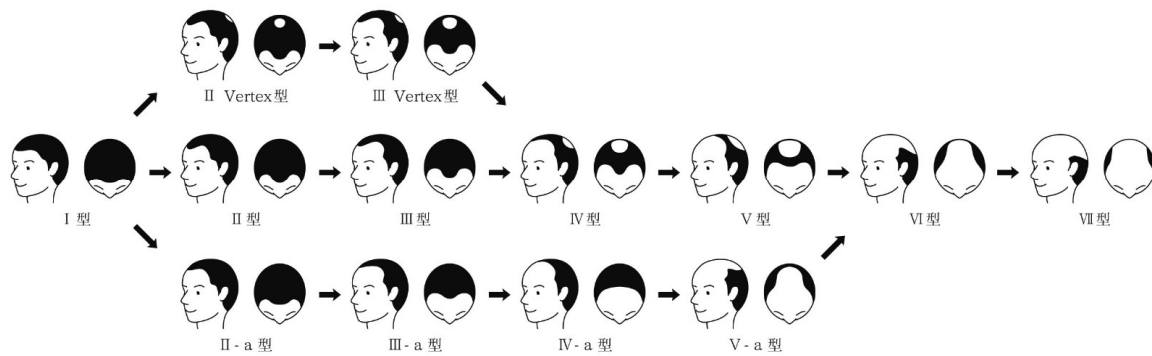
坪井 良治・板見 智・乾 重樹・植木 理恵・勝岡 憲生・倉田 莊太郎・幸野 健・齊藤 典充・真鍋 求・山崎 正視 (2010). 男性型脱毛症診療ガイドライン (2010年版) 日本皮膚科学会雑誌, 120(5), 977-986.

Wells, P. A., Willmoth, T., & Russell, R. J. H. (1995). Does fortune favour the bald? Psychological correlates of hair loss in males. *British Journal of Psychology*, 86(3), 337-344. <https://doi.org/10.1111/j.2044-8295.1995.tb02756.x>

## Appendix

### Appendix

薄毛状態の測定のために使用したイラスト



# The Relationship Between Hair Loss Status and Concerns Regarding Hair Loss

SUZUKI, Tomohiro

**Abstract:**

Hair loss is a significant concern for both males and females. This study investigated the relationship between hair loss status and concerns regarding hair loss in cases of male pattern baldness, while focusing on the influence of age. Additionally, individual factors such as social anxiety, heterosexual anxiety, and overall concern regarding appearance were examined for their association with concerns regarding hair loss. Study participants were 611 males, aged 15 to 69 years ( $M = 40.47$ ,  $SD = 16.59$ ). Participants completed a web-based survey that utilized illustrations based on the modified Norwood-Hamilton classification to assess hair loss severity, as well as items to measure concerns regarding hair loss, social anxiety, heterosexual anxiety, and overall concern regarding appearance. Analysis revealed that approximately half of the participants experienced some degree of balding, indicating that balding is a common condition. A weak positive correlation was observed between age and extent of hair loss. Age and hair loss status independently contributed to concerns regarding hair loss. Furthermore, higher levels of social anxiety and greater concern regarding appearance were associated with increased concern regarding hair loss, even after controlling for age and hair loss status. No significant association was observed between heterosexual anxiety and concern regarding hair loss.

**keywords:** hair loss, appearance, social anxiety, heterosocial anxiety, concern regarding appearance